九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

星野村の棚田 : 第4章『耕地の歴史と地名・地誌・民俗誌』

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

https://hdl.handle.net/2324/17968

出版情報：星野村の棚田 : 星野村民俗文化財棚田調査報告書, pp.144-205, 2004-03. 星野村教育委員会
バージョン：
権利関係：

んまりなかった。鉱脈にぶつかった後は鉱脈に沿って横穴を掘っていく（ヒ押し、ひおうし）。鉱脈を追ってダンカキ。坑道から上に上にあがっていって、鉱脈を掘り続ける。坑道の天井から上へと掘る事になる。掘っていく所にマイトを仕掛け、爆破されて鉱石が落ちて来る天井部分に、板をちょうど漏斗のようにしておく。その下にトロッコを準備しておけば、落ちてきた鉱石をトロッコが受け止めそのまま外へと運び出せる。

（鉱石が下だったら）からわにゃならん。下から上までいっちょります。上から下に石を落とすと、しばーらくして音がします。上はたいがい（地上に）穴があるですよ。殿様鉱は余りあがっちゃあおらんです。ところどころ高いところが入っちょるです。

二つの立ていれは２号Ｂという坑道の立て入れにもなっている。せまーか坑内、だいぶ下がっている。

どうやって掘るかは選鉱長が決めていた。この当たりではマイトは朝から使っていた。まず削岩機で１メートル半くらい掘っておいて、岩盤によって穴の数は変わるが、穴をいくつか掘ってその中にダイナマイトを入れる。大体一回の爆破に１７～１８本使う。導火線の長さは１メートルくらい。

掘り出された鉱石は空中索道（ワイヤーを用いて運ぶ）が使用された。箱に入れられ上に下にと運ばれていた。その後、箱詰めで精錬所に送られ精錬された。精錬されたものはさらに、佐賀関へと運ばれた。坑木はだいたい松、この辺じゃ松はちょっと。杉でしょうね。坑夫は一年中鉱山で働いた。現場には見張りの職員がいた。

ジョウヤマ、タニガシラ、フドウダキなどクマド部落の上まで斎藤さんが持っていた。クマドは露天掘りだった。自家製で掘るときは、鉱主が鉱区権を持っているので、歩合制で請け負いで行っていた。

金を取り出す方法：

1．掘り出した鉱石を水車でついていた。鉱石を砕く。
2．砕いた鉱石についたものに水を加え、泥のようにする。それに水銀をまいて、砕けた石から金銀をとりだす。
3．鉱石の品がよければ、一昼夜くらいで水車をとめる。水銀は青金（あおがね）（金と銀の合金）だけを取り込むので、ゆり鉢（木製）を用いてゆりあげてしまうと、水銀と砂とが分離され、水銀だけが残っている。水銀がキョロキョロしていると、金銀があまり集まっていない証拠。水銀が硬いと金銀を多く含んでいる。
4．集められた水銀を鹿皮で絞る。そうすると皮の毛穴からでてくる。また、麻苧を柱にきびつけて絞る。
5．それを焼き、坩堝に入れて煮る。水銀を気化させる。鹿皮には青金だけが残り、気化した水銀は冷やすことで液化させ回収する。
6．青金を黒色の碁石にこすりつけ、硝酸で焼く。すると銀は蒸発してしまう。
7．残りが純金となる。

金を取る人は鹿児島から来ている人が多かった。オヅメには昔は谷沿いにずっと水車が並んでいたものだった。自家製の人は多くは専業だった。水車はだいたい一台～二台くらいはもっていた。水車は大工に頼むか、自分で作っていた。自家製の場合、水車など金山を掘るための設備は親から譲ってもらう事もある。探鉱は自分で行う。探鉱をして自分で掘っていく。その時はそこの土地の権利を持っている地主に相談して掘りはじめる。鉱主から歩合制で採掘を行っていた。金が見つかるのは運しだいで、鉱区権内であればどこを掘っても自由であった。露頭に出ている岩山などであれば、土地所有権を持っている人に権利がある事になっている。その土地の地表から

地中3尺より上が、木（土地）を所有する地主の権利範囲で、それより下が鉱区権の範囲であった。この権利の調整は話し合いやお金を払うことで行われた。収入のうち、7割が自分のもので、3割が地主のものとなる。また、毎月15日に納めていた。水車は自分で作るか、大工に頼んでいた。

城山では掘り出した金は箱詰めにして精練所へと送っていた。二百トン崩しと呼ばれていた精練所へ、マイト箱の空箱にいれて別にして送っていた。斎藤さんが昭和６、７年ごろに鉱区権を買い、産金が奨励されて二百トンくずしの精練所が作られた。

女性は選鉱員として働いており、坑道に女の人が入ってはいけないというような事はなく、使いで坑内に入る女のひともいた。女の人はおもに選鉱場で働いていた。選鉱場には男の責任者がいた。その理由は女性の選鉱婦は時々間違える事があるからだそうだ。鉱山で働く人には朝鮮人も多くいた。皆日本人と普通につきあっていた。名前も日本風だった。丸山さん、大石良雄でんおった。ひとつもかわらんつきあいを、しおった。大将が朝鮮の人やった。

坑内でやってはいけないこと。口笛をふいてはいけない。それと猿の話をしてはいけなかった。猿は去るに通ずるから縁起が悪い。そのため猿のことを話すときはモンキーと言わなければならなかった。手をたたくこともいけない。タバコは吸ってもよい。

（渡邊太祐・伊東和博）

4.3.16 大牟田地区　2002年８月21日

・地名と伝承

田中稲良さん（昭和１６年生）
聞取者：服部・渡邊
・地　名：
アクタガミ、ジデン、ショウヤダ、ババヤキ、マタヤシキ、ナカノサコ、ツツミノサコ、シンヅヅミ、フルヅツミ、ヤネダイラ、ミツイシ、

庄屋田は７５６７の２番地。道路につぶれてしまって一反ばっか。庄屋はここら辺はおらんばってんが。古かばあさんの話では庄屋田の向こうに七人家族がおらしたげな。むかえにうずみおろうが。黒曜石の鏃が出る。雨が降ったあと、いくらでも、でよった。おどんよりもずーっと前。ばばやきのはたけは茶畑あたり、また屋敷はまた左衛門、また三郎か、またという名前の人がいたんじゃろう。

・耕地と水利

入植前から古堤も新堤もあったけど、新堤は２８水で潰れてしもうた。古堤、いまは合鴨。ゆんさこ、つつみのさこ、堤の名前はない。

田の水が少なかったけぇ、堤を作ったんじゃろう。吉井の矢野、矢野金山、酒屋。矢野が田を作ったころの池じゃろう。ばばさんがそういった。三つ石、いま茶畑でのうなった。ムネ（ミネ）にあった。

水田は元からあった。段々畑を開いてさつまいも、のいね、あずき、斜めにいきなり焼畑。唐ぐわやら、しょうけやらで土、石を運ぶ。二間位の細長い畑．ハレー焼きはほんの小規模。開拓地になってから分けた。うちは増反開拓者。土地を増やす。入植者は十六戸ぐらい。

材木を出した後、残ってる板をもらってくる。いまも五衛門風呂。たきもん取り、杉の葉取り、山が塾じゃった。

ジ　デ　ン…オカンノンサンの神田ではないだろうか。
ショウヤダ…大きさは一反ばかり。

水田は入植する前からあった（戦後の入植は戸数で１０戸程度）。田への水は、ほぼ両ツツミの水でまかなっている。出水も使用するが、予備的なものである。サコから少しずつ

出る水をため池へと引いている。

今のツツミでは、栓を抜き水を流し続けると、三日ももたない。しかし、フルヅツミには調節することで一週間から十日分の水がある。フルヅツミは田と一緒に作られたのではなかろうかということだった。

・食生活と食物の貯蔵

昔は、麦と米の比率が七対三くらいのご飯を食べていた。それに薩摩芋をいれることもある。押し麦（オッシャギ）ご飯を最もよく食べた。入植当時の昭和２２、２３年ころは食べることが何よりも最優先されたし、またそれが当然だと思っていた。

芋などは横穴を掘ってそこに貯蔵していた。１ｔくらいの芋はそこに収納可能だった。芋ガマとよんでいる。芋ガマは幅１ｍ５０ｃｍ、奥行き３メートル、高さ１メートル３０ｃｍ。ここに収納される芋は食用のもののみ。種芋は別にしてあった。苗床を作り、そこに種芋を入れる。ある程度苗を成長させ、苗の蔓を切り、畠に挿していく。畠は前もって耕しておき、畝に蔓を挿す。薩摩芋栽培の注意点は、排水をよくしておくことだそうだ。

畠ではサトイモも栽培していた。麦は田にほんの少し作る程度。麦の多くは購入して、食べていた。

米は４０俵ほど玄米で貯蔵していた。松で作られた籾櫃、穀櫃に入れておく。昔は木で作られた籾擂り機のようなものがあった。米は売るほどの量は無い。自家飯米程度でやっと。

種籾だけは虫がつかないよう煙の当たるところにつるして保存していた。

・牛と馬

牛のほうが扱いやすい。馬は鉄を打ってある（すべりやすい）。こん下でも材木出して、こけて死んだ。足踏み外して１００メーターこけた。足が折れて殺した

病気で死んだとはいけるけど、（怪我で死んだから）たぶん食べたろう。たいがいなダメージですよ。新たに買わにゃいかん。ふつうはある程度で交換するけど。馬いけ場はカタギの橋のとこから左の方。馬まつる観音さんがある。夏休みの馬草切り。いまごろ４時から切りにいった。薪取り、近所も遠かとこも。

田を耕すときには、牛、馬に鋤を引かせていた。馬のほうが耕すのが速い。逆に牛は遅い。農閑期は、馬に材木だしをさせていた。一年中馬と一緒だった。夕方は馬の飼い葉にするため、草きりに行っていた。秣きり、薪取りが子供の夏休みの仕事だった。

どきどき、博労がきて、馬や牛を交換していった。

ナベ池にしいたけの原木を浸していた。昔は原木に菌を打つのではなく、木に傷をつけ、水に浸していた。それだけで自然にしいたけが生えてくる。

その池は天然水を集めて作られた小さなもの。木を浸し、つけておくためのもので小さく作ってある。

鏃が土中から発見されることが多い。小指程度の大きさの鏃。鳥を射るためのものではなかろうか。

山は入植当時から杉山。

コガトラオさんの山に山の神様が祭ってある。昔は注連縄をしめ、お神酒をささげていた。無論、集落の人たちの手で全て行われていた。

（渡邊太祐）

4.3.17 尾払地区　2002年８月22日

二田高広さん（昭和２０年生）

聞取者：服部・渡邊

・地　名

ヨコヤブ、イワヤド、イワヤドバシ、ヤカタノサコ、オナンシンドコ、リャーグイシ（リュウグンイシ）、ゴロウサコ（グロンサ

コ)、カンノバ、マロシテン、マエダ、ナガタ、ノーシロダ、モリビラキ、ナカノダン、キュウダ（キュウリダ)、ヘコダ、ウジャランクチ、ナナマガリ、トオンモト（＊トオンモトの中に以下三つの地名あり）ウエンキレ・シタンキレ・ナカンサコ

・地名と伝承

カンノバは普通の山（焼畑とかはきかんもん、そげんこっちゃぜんぜんなか)。

マロシテンには祠などはとくにない。しかし、マロシテンの上に茅原のもんが二つ祀っとった。その下の方かも知れん。正月には注連縄をかけに行った。おどがいう「まろしてんさん」より上ばい。その山は茅原の村山だった。

オナシンドコ、ここだけ水がある。今でんある。ふつうのサコには水は少ない。

オナシンドコに（だけ）田んなかがある。石垣がついてある。前ん代（先代）まで作らした。ヤカタノサコは（土地の）形としては田ができるとこはあるが、水がない。田が作れない。道の下がナガタ。マエダやらナガタやらみーんな石垣たい。

モリビラキはノーシロダの横下にあり、三枚の田から成っている。ナカンダン(中の段)、キョウダが下がトオンモト（トモト)。トオンモトのなかにナカンキレ、シタンキレ、ナカンサコもある。何十枚もある。一枚ごとに名がついとる。トオンモトは４～５反はあろう。

ヘコダもしこ名よ。ノーシロダばっかり。エノウラは家の裏。ナカダン、ウジャランクチ、ナナマガリ。ウジャランクチは大茶原口。三坂からお茶を摘みにきた。

わたしが嫁にきてから、開いた田はない。きたときはみんな開いてあった。きれいじゃたですよ。昭和の初め、石を拾えぐらいに石垣は出来たった。だんだん崩れてしもうたり。

田は増えるどころか減ってばかりだ。一番よかとこ三枚、（田が）道にとられた。五年ぐらい前に減反がきたから。ねぇならまだ、どこでん作りよったじゃろう。せまちだおしは田からお茶畑にするとき。減反でそうした。

それにしても減反はうらめしかじゃ。ざまにありかさ。く（食）ーしこなら作らんほうがえぇ。田は水持ちのよかろう。（下の）三坂へんで、えらく水が減った。有明海に田を作るくらいなら、なんでここの田を大事にせんのか。 ― この辺の田、水が貯まらんもん。トウモト、モリビラキ、芋つくとってじょう。小豆と芋とつくとったい。二年ほかの品物作ったら田に穴が空いてる。田にはできない。盤をしむる「しょうど」（床土）をたたいて水がもらんようにする。いっぺんもぐらがでたら（水がもる)。二、三年だらけたら、だめ。

近頃は、減反せよとやかましい。減反のため水田を茶畑に変えていく。そのときにセマチだおしをして一枚一枚の面積を大きくしていく。二年間以上ほかの作物を作れば、そこはもう田には戻らない。水田をそのまま放っておけば、二年で中に入れないほど草が生い茂る。水田がなくなれば水もたまらなくなる。水がなくなると小豆やイモもつくれなくなってしまう。

・山での作業

夏休みはずっと草きりに行っていた。一日二回。カワトの境に草きり場があり、朝、夜一回ずつ行っていた。石垣に生える草も切る。これは畔ぎりといっていた。ひと夏に五回ほどおこなう。干草は天井の上にしまっておいた。

山での作業は収入になるものもあった。山には三椏がおおく生育していた。カゴの木はモリビラキの下あたりに生えていた。これらの木を切り、釜にいれ、蒸して皮をむく。これを茅原から業者が取りに来る（この作業がいくらかの収入になっていた)。切ってしまった木の根を畠に干していて、芽が出てきたも

のをまた植えていた。(カゴの木の本数維持・管理が行われていた)

竹の皮を干して売ることもあった。竹はいろいろなものに使われていた。トイレも竹で作られていたし、タンナカの水入れなども竹である。

そのほか炭のからいだし仕事もあった。炭焼きが山に来ていた。これは賃仕事であり収入になった。

・食生活と自足

戦前は水田を７、８反作っていた。昔は反当三俵。一年の総収穫量は２０～２５俵くらいか。四人家族に必要な飯米はおよそ１５俵。

家族が食べるものの多くは自家製だった。蒟蒻はいっぱい作られていた。猪が畠を掘ったり、霜でコンニャクイモが腐ってしまうこともあったが、自分で作っていた。それから大豆で納豆、味噌、醤油もつくっていた。味噌は麦で麹を作り、そこに大豆を加えて作る。

山から得られる食料もあった。柿、栗（山栗もあり)、アケビ、葛などである。栗はゆがいて干し、保存していた。葛からはカンネ団子を作っていた。その他、山芋ほりにも行く。

自足できないものは、正月のチクワと蒲鉾、その他塩、酢くらいだった。これらは下から米と商品を換えないか、ともちかけてきていた。米を貨幣の代わりに使う物々交換だった。

買った塩もそのまま使ったりはしない。塩はカマギという入れ物に入っていた。これを桶の上に載せておく。時間がたつと粗塩が空気中の湿気を吸い苦汁がしみ出る。苦汁は下においていた桶に溜まる。集めた苦汁は豆腐作りに使う。無駄がなく合理的だ。

・家　族

おばあさんは黒木からお嫁にこられたそうだ。お見合いもせず初対面での結婚だった。この結婚はある人から持ちかけられたものだった。結婚してからは苦労の連続だった。ご主人は戦争に行き、そのまま帰ってこなかった。終戦の年に生まれた御当主は、出征したお父さんの顔を見たことがないという。「お父さんがいればもっといい暮らしができた」という言葉が心に重く残った。

しかし、最近タレントのサンコンがここを訪れ、一家でテレビにも出演した。そのあとテレビ番組の企画でアフリカへも行った。いつまでも苦しいことばかりではなかった。

（渡邊太祐）

4.3.18 茅　　原　2002年8月

角田巌さん

地　名

フルタ　ヒンクチ（意味はわからない）　イワヤ（昔の田、石垣があって、4・5枚。おぼえたときは作っていなかった）　ナカノ　ムラノシタ　カワウチ（川より手前にある）　ハシノモト（田のあるところ、橋の位置は変わっていない）　ニタツカダニ（大水は出ない）　シロマン

岩屋にも山口にも田はあった。シロマンは小さな道があった。

茅　原

井　手

古田井手、いちばん太いのはこれ。途中で

も出水を取っていく。本腰の井手はなかですよ。水源の谷は本線だけど名前はない。古田はかつがつ。上のもんが取ったら下が取る。フルタ———ふるかっでしょう。フルタは全部井手。全部石垣。高さ２～４メーター。減反の始まってからすぐにやめだした。いま田がのこっとるのは二軒分で二反。うちは最後の二反を五，六年前にやめた。

山口も古かろう。二反ぐらい。ここは井手の必要はない。ハシノモト、今減反で田はない。梅ノ木に少し。

村井手：正式に手入れをし、行事をするのはこの井手。井手切り、井手さらいをする。いまはビニール。

古田は精一杯できて反当六俵。戦争前でもそれぐらいは取れた。前んほうができよったですよ。戦後誰も草をいれん。金肥を投げ入れて、ほったらかし。日当たりもよかですよ。尾払はできんとですよ。12の東、13区はランク外。草きり山は大曲の上。毎年毎年の個人の草きり山。野焼きはせんです。古田はたいがい私の田。ハシノモトの草切り山とフルタの草切り山だった。ほかのひとは田ん中のくろを切るぐらい。

草で怪我をしたことがある。手が曲がらん。手袋がなかった。牛の飼料と一緒、いっぺんマヤ肥えにするから。牛の肥えばってん、マヤン（馬屋の）肥え。草きりで10日かかってこずんだ。まぁ一箇所、川べたの草きり山もあった。ホノキは仁田塚といいます。コゾネがあった。マヤン肥えは麦蒔く時に入れる。ポロンポロン、11月麦蒔く肥だけど、根肥えとして入れる。5月時分にも米の肥として効く。1回の肥料で2回効く。

牛はメスがよかっち。オスは使いにくうして。メスを２歳頃仕込む。3、4歳になるとバクリュウがきて、慣れたのを町へ売る。バクリュウ肥やしといった（？）。だまされて。5000円ももらうならよかった。昭和30年ごろ。牛は使いすぎる。鼻の下がカラカラになったら飼われん。こっちの田植えがしまえてから、下の筑後平野で使う。バクリュウに売った。2，3歳の子牛が来る。山では使えん。北河内のＨさんが、バクリュウ。知ったふりが多い。

馬は石垣がたっかけん（高い）、えすかもん。牛はボチリボチリ行く。山仕事、馬の事故は多い。山出し専門は牛もやった。足がぬるかかけん（滑るから）、藁でくつを作ってやる。飯くうて、すぐ、くつを作る。牛は四足、4つも作る。昼寝はできん。

みそそくり（箕作りか）、天草にき。天草で作ってみそそくり専門に来た。（修理が）上手。（箕は）先がすぐかけてしまう（それを直した）。お観音さんにいた。

ホイト、モノモライ、これはまったく別。袋ぶら下げてきてから、米をもらった。米を皿に引っかいてから、それで何げに、ことわらずに、どうでんやったばい。留守番しているのはとしよりだから。□□って大分県境の矢部のほう。□□ほいと坊主、こげな大きなかごをいのうて持ち込まれると。ごちゃごちゃお経は唱えた。

みそそくりは専門家。ネコダ、稲干しのむしろ、（それを作る人は）泊り込み。

—ほかにどんな人がやって来ましたか？

芝居はむらの何人かが有志でやった。役者を呼ぶ。大根3本持っていくと、やってくれた。シエゴ（塩井川）そこで芝居、田ん中でテントを張ってやった。まぁいっちょは三坂。田ん中のホノケにそれらしい名前「じょろう町」がある。正念寺の上下、それからついでだけど、この辺に古墓、年号は200年ぐらい前、弘化とちがうか。じょろう町で死んだやつをここへもって来た。死んだもんが出てくる。遠くへ持っていったっとちがうか。

ハレー焼き。しよりましたばい。近所の人やとうて。えごかくもん、朝はようから。ホタチ（防火線）、ずーっと切ってから段どりする。昭和17年か18年に手伝いに行った。ぜんぜん取れんじゃった。いのししが食ってしも

うた。それから兵隊にいった。火を入れるとき――酒もまかない、呪文もとなえない。いまは火がえずなった。昔もえずいが。焼いたら（延焼したら）補償した。仲裁人を立てる。相対（アイタイ）ではできん。ひろう焼きましたばい。こずんでやる。えずかもん。谷とかサコ、加減せんと。寄せ焼き、真横に火ィつけて。火をまきこむとヨコと連絡を取って。失火したこともあるだろうけど、回数はわからん。灰焼きにして芋でん、何でん、山で作った。

カゴは一年で切ってしまう。根を切ってから根で取る（挿し木で増やす）。5寸ぐらいに切ってから埋（い）けてから。よそん山に植えたらよそんもんが喜ぶだけにきまっとる。桐も同じ（挿し木）。カゴは現金になる。茅原のじいさん、あん人がまとめ買い。晩カタ、3尺ぐらい、なかの芯を持って帰る。むき賃として金をもらう。三極カゴはやったと思うが結果はようなかっただろう。カン根ダゴは食べた。

アブラメ、ウナギはおったけど毎年コンクリーになる。アクで死んでしまう。ゲラン流しがちょいちょいあった。ゲランは買うのに印鑑がいる。根を叩いて汁を流す。死なんぜ、死なんぜ。どんぶりじゃけん、深みで上を流れちょる。ちいと多すぎたぐらいのもん。40年か50年も前の話。もう先にやったものがおった。

犬とかはしらんが、兵隊のときはねずみを食った。ちょっと塩からかもんな。アツ灰のなかに毛なり入れとくと、真ん丸くなっている。蛇もトカゲもくった。

―戦地はどちらですか。

ニューギニアのアンボイナ島。アンポンタンの語源になった島。アンタシンポン、すんません、こらえてくれって意味の現地語。それが島の名前になった。2年間、毎日空襲ばかり。死んだ兵隊を埋けてやる。アメリカは結局上陸しなかった。特攻２５・特別根拠地。湾口はひっかけん（低い）。日本の飛行機はヨコぶりに翼をふる。緑の十字は日本の飛行機。

8月15日はしらんかった。司令官のところへ兵卒はいくこともできん。

スラバヤ米、虫が食ってしもうた。よかとこだけ兵隊、残ったのを捕虜が食う。にごうして（苦くて）食えるか。捕虜虐待、捕虜銃殺のかどで、現地裁判。部隊長、副官、中隊長、小隊長、かしらはみな銃殺刑。下士官は（懲役）25年。講和条約後日本にかえしたが、みな巣鴨刑務所行き。わたしら少年兵は1回目で無罪。上官の命令は絶対服従だったということがわかってもらえた。

昭和21年投降。使っていた捕虜が勲章つけてきた。6月特別第一船（？）で帰ってきた。500人いて150人ばかしか帰れんかった。復員したが、戻されて銃殺刑になった人もいる。自分は無罪。話されんことがあるけん、話さん。

＊アメリカ機は高い上空から爆弾を落としていくが、友軍機は捕捉をおそれて低空飛行。姿を現さない敵に鉄砲ひとつ撃ち返せず、毎日戦友の遺体を埋める。絶望的な日々--それが戦争だった。捕虜銃殺を断罪する戦勝国が、捕虜であった日本将兵を銃殺する。戦争は人を狂わせ理性を奪う。角田さんはそう訴えたかったのであろう。

（服部英雄）

4.3.19 長　尾　2003年８月23日

山口尚樹さん

聞取者：服部英雄　藤本維佐武

地　名：

ヤビツ、七ツヤ、ヒザツキ、タケノヤマダニ、ヒロゾウダニ、タカイシガキ（高石垣）、ムクダニミチ、ナナマガイ（七曲がり）、チョンノハカ、ニシノタニ、シンデン、ジデン（寺田テラダ）、ナカダ（中田）、ヨシノザコ、ジャブチ、オタテヤマ、カンザン、ヨンシャンブ

チ、シンヤシタ、チンミチ、スナハラ、サケンタニ、キンノキザコ（桐の木迫）　マルヤマ（丸山）

屋　号：

本家　新や（二つある、もう一つは隠居の新や　本家の別れの新やはその一統だけで使う）　いんきょや　いちつか（一里塚）　かじや　まつば（松葉・隠居ともいう）　しもまつば　宮脇　かど　さかぐち（二軒あっとです）

高石垣と呼ばれる：実際には、もっと高い石垣もあるように思われる。

地名と伝承

ジデンでは天照大神社（登録名、通称だいじんぐうさん）の祭りに使用する米を作る。余った米は祭りの費用に回される。

農地改革まではジデンはお宮も所有地だった。テラダは浄眼寺の田だと言う。一枚一枚がとても狭い田だった。一反に２８枚もあった。

タカイシガキは一枚のセマチが広い。石垣の高さは四メーターぐらい。

サコダはヒアテ、ヒカゲでいえばヒカゲの方。茶畑、むかしは麦を作った。

ジャブチあたりは泳ぐことができる。上の橋からどんどんと飛び込んでいた。ただここで足をとられることも多かった。蛇淵橋は低いビタビタ橋だった。

ヨンシャンぶちで男の人が入水したと伝えられている。マキコンバ（巻き込み場）、急に深くなっている。遊んではいけんといわれても、そこまで潜りきらんと一人前じゃない。

カンザンは久留米藩オタテヤマ、杉の木山、終戦直後開墾、石垣は多少あった。いまは雑木山と竹。

オタテヤマという場所はいま、水田。

シンヤシタは淵の名前。シン道は村の道。

チョンノハカは差別されていた人々の墓だといわれている。村の墓地とは別。

＊筑後ではTYOURIということばがあった。現在では使ってはならない差別語であるが、歴史的には「長吏」の語に由来した（『部落史用語辞典』）。Ｒ音が脱落し、イ音・ノ音がン音化した。長尾には庄屋もいたから、差別された人を季節的にか、あるいは臨時に雇用・使役することがあった。不慮の死で、引き取り手がなく、村の側で弔い埋葬したことを、この記憶が示している。もとは小さな自然石を置いたようだが、いまは確認できなかった。

ほかに田の名前には自分方のみで通ずるウーゼマチ、コゼンツ、マゴゼマチ、ヒョウタンゼマチ、マルゼマチといった。「畝町」を大、小、瓢箪、丸で形容した。マゴゼマチは大きな田に接して少しだけ、つ（築）いてあるような、小さな田をいった。

広さによって七升蒔き、三ど（斗）蒔き、一と蒔きなども使った。麦、蒔きよったんですかねぇ。一反に一斗ぐらい蒔く。

稲はむかしはよそでは荒蒔もした。一反あたり直播き（じかまき）だと一〇キロぐらい、蒔く機械もある。苗代だとぐっと減って一反あたり二キロぐらい。星野はやっていない。

山バレの野稲は五月に入ってから。里芋のあとに植えた。稲でも直播き。一反に三俵もとれよったじゃろうか。三俵でうんととれた方じゃろう。

里芋、小豆、といも、大藪の奥であるし、

刈りにいったらウサギが喰いきって。ときならんとき（実になる前）、鎌で切ったみたいにぶつぶつ切って。杉、雑木、竹山。終戦直後、食糧難だった時期、杉の木が切られた。杉山にしかえる時。三五、三六年頃まで、どっかでは必ず焼く。

杉の植林は岩の上に土を盛ってでもした。役場から下はセンマイ岩（ガン）、さらさら剥げていくから、それで付いた。

長尾用水は庄屋が自分方の使い水に引かした。イデン（井手）道、用水に道が付いている。赤土を担って行って、カンの穴に打ち付ける。冬分、水を通さんもんで、よけいに穴が空く。赤土採り場は一ヶ所民有地にあった。大神宮さんの方じゃないか。金ば出して取った。いくらかはわかりません。十何軒、出て担う。重くなる、あんまり多かけん、いれるな。水はぎりぎり。田の真ん中に畑がある。水平にならしてある。水が足りんもんで、畑にしてあるんだろう。水利の規約は書いたものがある（P151の写真）。杉、檜になって水は極端に減った。長尾用水、受益する水田は意外に少ない。面積は１町歩程度。うがったトンネルはない。マブという言葉は聞かない。土方の人は隧道という。

庄屋もおりゃぁ、セドウ（専当）もおる。代々かは知らん。山道係、お宮の係、水路の世話人。道の修理、山ン道作りするぞって。

山で炭を焼いた人は二・三人ぐらいなもん。ネザレ、田の草むしりでも、日雇いに行く。うちの親父、金山がありゃ、金山の仕事に行った。金山の影響かな。お金が少しずつ貯まった。

・祭りと座

スタヤマはお宮の山。村山（共有地）で株になっている。松山だった。株の口数がちょうどジンガ（神裸）の数。長尾は六〇なんぼ家があるが、ジンガは三六軒。本氏子は長尾だけで３６軒で、３６軒は１２組に編成されている。

ジンガだけが祭りを取り仕切る。土地持ちの百姓じゃないとジンガになれないげな。大きな家の分家はかたられる（明きができたときに加入が認められるの意か）。１２組という数は干支に因んでいる。１組は３軒からなり、２組合わせて６軒でジデンを作る。この６軒でオマツリの担当の番になる。この３６軒のジンガでは、６年に一度世話方となり、３６年に一度座元になる。お祭りは座元の家で行われることになっている。とわたしでお椀で何杯も呑んだ。旧の十一月十一日が収穫祭で本祭り。旧の六月十一日は祇園祭だった。神裸の大正時代の規約がある。

・彦山祭り

こちらは村全体の祭り、ジンガじゃない人もかたる（ジンガ以外の人たちも集まって行う）。決めごとをする。境争いなどのときもそこで仲裁を行っていたらしい。一戸から必ず一人出るようになっていた。この集まりでは全員一致主義が採られていた。

・星野村の鉄砲隊

近世、星野には２００人ほどの山筒隊（鉄砲隊）がいたらしい。彼らはその昔、豊臣の九州征伐時に島津側に与し、全滅した。

その後残っていた樋口が星野の代官となった。島津が降伏したのち、豊臣秀吉は朝鮮出兵を敢行する。その際、星野の鉄砲隊も参加したという。小早川家の樋口代官のもとで働いたと伝えられている。それからも星野の鉄砲隊の活躍は続く。徳川氏により幕府が開かれた後、切支丹禁止政策に反対した人々が、原城に立てこもった。世に言う天草の乱である。このときも星野から３３名の鉄砲隊が出動したといわれている。

＊天正六年の大友方の島津攻めに星野方中務大輔、星野長門守、星野若狭守の名がみえる（『鹿児島県史料・旧記雑録後編』１－１０４２、１０６１など）。これによれば星野長門守はいち早く島津方に内応の矢文を送った人物だった。

星野上野介鎮虎は天正七年十一月、麦生鎮綱とともに、その城（星野城）を守り、また日田郡に越山した。十八日両者は大友義統から軍労を賞されている（『大友家文書録』三-３２頁）。また鎮虎は天正九年十一月二十一日筑後境の豊後国日田郡針目山で、秋月、龍造寺方の兵と合戦し勝利した『大友家文書録』三-９４頁）。星野氏一流のなかでの各人の関係、島津、大友との関係は不明である。

このように数々の歴史に残る戦いに参加した星野の鉄砲隊は、正徳年間（１７１１～１７１５）に久留米藩主有馬氏に召しだされ、２５人が市中警護などに任ぜられた。

このほか星野に２００人の鉄砲隊が常時いたとされる。日ごろから訓練が行われ、有事に備えていたという。

維新後は、鉄砲隊の中でも五稜郭に行った人がいる。セドウ（仙頭）関係の人は士族になった。

長尾：トタンにおわれているが、萱葺の家が多く、文化景観となっている。

・高木家

星野シカロウ（鹿朗か？）という人が小早川のころ代官だったらしい。その後、宝暦年間（１７５１～１７６３）の百姓一揆の責任を取り、辞めたという。

高木はもともと熊本方面から来た浪人であった。ただ侍なので読み書きができる。村では寺子屋を開いて子供たちに読み書きを教えていた。庄屋がいなくなった後、読み書きができるという理由から庄屋になった。

高木の本家は現在多くの山を所有している。庄屋の分れ家では、作男をつかっていた。カミノオの方にも土地を持っていた。この家の田植えの時には２０人くらいが手伝いに行っていた。カミノオ集落に人はほとんど来ていた。自分の田よりも、この家の田植えが優先されていた。お礼としてこの田植えは認識されていた。

近所の田は自分たちで作っていたらしい。その他の直営田はカミノオの人たちが手伝っていたと思われる。カミノオの用水関係の山を高木家が買っていた。ナガオの前の山である。

庄屋の宅跡。石垣はとても高い。

・長尾はわたしたちが覚えてからは牛が多かった。一家にも人数は多い。人間がマガ（マグワ・馬鍬）を引っ張った。三本鍬、三人もいれば鍬を打った方が早い。鋤は、さす

がに人間は引かなかった。馬は少ないから馬洗いも特別にない。長尾からも広瀬からも蛇淵に連れて行って洗った。

・星野川の魚たち、生きもの
ギュウギュウ、ハヤ（白ハヤ、黒ハヤ）、イダ（ウグイ）、ドンコ、カワドジョウ、シイチキドンコ、ヤマンカチ（ヤマンカミ？）、ナマズ、ウナギ、ヤツメウナギ、コイ、フナ、ホウゼ、アブラメ、ヤマメ、ソボクチ（アブラメに似ている）、カワニナ、サンショウウオ、イシバヤ、アサデ
・山のキノコ、竹
マツタケ、シメジ、シモカゲリ（ヒラタケ）、キンタケ、シイタケ、カゴナバ、冬虫夏草。矢部村では、カメムシにできた冬虫夏草だけ金になるという。
シノベ、マタケ、シラタケ、シホウチキ、ゴサンチク。
　シラタケは竹の皮に白い部分が多い。日本でも特殊な孟宗竹とされる。高級履物材として扱われる。ゴサンチクは年寄りの杖に使っていた。有明海の海苔の養殖用に竹がたくさん出たことがあるという。

（藤本維佐武）

4.3.20 仁田坂　2003年８月22日

原田寿郎さん（昭和三年生）
聞取者：岩成俊策　服部英雄
生業：
　昭和三年に原田さんの父が一部の田を開く。明治の地籍図では山林になっているところが、いま水田になっている（次のページ写真参照）。以前は荒れ地だったものを原田さんの父は火薬を使い、石を割って、開墾に取りかかる。そのころ家畜（牛馬）が入って広い田が必要とされていた。しかし、戦中戦後の最中は自分たちでは食べる事ができなかった。
　供出せにゃいかん。半分が保有米。
　それでも足りず、甘藷と芋が主食であった。
　オヤブ、塚原まで作っていたけど、昭和四十三年に減反。背中にカラって、天秤でいないて（担いて）。シミズというとこが二反ほどあった。オヤブの下、１４７８６，７８４番あたり。
　シミズも田んぼできた。小屋があった。雨の日にご飯食べるけど、泊まることはない。柱六本立てて、立てる前に柱の根は火にくべて焼く。腐れん。藤葛で結んで、釘は使わん。杉皮に石を載せて。二、三日でできる。いまはもう藪。そこまで歩いていくことができない。ウチノスミの田んぼとかイシワランサコ（石原の迫）もあった。甘藷は、うちのまわりの畑。杉を切ったあと、傾斜のところでハレー焼き。アワ、ヒエ、ダイズ、ソバを蒔いて育てた。（作物を換えるし、焼いた灰だから）イヤ地（連作障害）はない。「ホタチ」（防火線）をあけて上から火をつける。四メーターの「ホタチ」で、他の山に火が燃え移るのを防いだ。山の頂上の名前は「ホタチメ」。「ホタチ」と関係はない。ハレ焼きは、草が枯れている四月が一番燃える。八月過ぎは青草がいっぱい。燃えん。広うて一反ぐらい。人力だけ、家族、親戚で作った。むかしはイノシシがいなかった。人間がたくさんおるとイノシシはおらん。わたしはヒエは食べたことはない。アワは粟餅。ご飯に混ぜる。（土地台帳の）「切り替え畑」は焼き畑。ハレー焼きとあんまり変わらん。土地を持たんと選挙権がない。官山を払い下げて部落有林になしていた。
　この家は昭和二年の家。畳にする前は板の間に筵。いろりがあった。草葺きで、茅山は樋下（ヒサゲ）の共有林。鈴の耳納からキンバル（金原）。茅で炭のダツ作り。炭一俵１５キロぐらい。強い人は四つ。それを背負って一人前。女は二つ。炭木があるところは迫さこにある。雑木と竹は人家の周りに必ずある。山で迷ったら竹の所を下れ。行軍の時、配属将校に習った。八女から山鹿まで十二里の行

軍。一晩中。一時間で十分休憩だった。

シミズにも炭窯。二十から二十五俵出た。ニッタツボでも焼いた。人の山、相談して所有者に少しお金を払った。

商品作物としてカゴや銀杏、コンニャクを栽培し、業者に売って生計を立てていた。時には商品作物として大麻を栽培する事もあった。麻糸は蚊帳とか着物。麻、イラクサは糸。カゴはミツマタカゴ。紙のために買いに来る。皮剥いでから業者に売る。パルプができてだめになった。また竹の皮拾いも重要な収入源の一つであった。竹は有明海の海苔竹に使われた。柿は風浪（フウロ）さん（大川市）に売りに行った。業者も買いに来た。柿一連は百個。大きいと小さいとがある。小さい柿は串にする。栗は自家消費。綿は畑で作りよった。ばーちゃん一反いのらした。わたしはしらんなぁ。

農耕の際、必要な牛馬は家族同様に扱った。手綱は二本、牛が慣れりゃー、一本。年寄りは一本。いっしょに鍵屋に寝泊まり。牡は金抜き、山出しは金付き。竹を手綱の代わりにする。鼻繰りの横に付けてあったもんなぁ。真鍮の輪になる前は檜の枝を曲げて紐で結んで作った。通すときに鼻繰りに味噌付けると血が止まった。牛馬がいたころは家にノミ、シラミ、ハエ。ノミ、シラミよけとしてスギノハをぶら下げておくと、牛馬はそのスギノハに身体をすり寄せていた。牛が死亡した際も家族同様に扱い、土葬による供養を行った。牛馬は昭和四十年代まで飼育していた。

② 戦前、戦中の食料不足とその対応

戦前戦中はとにかく食べるものが不足しており、昭和十七年、十八年頃が最も酷かった。八女農林学校でも白米が出されなくなり、代わりにコウリャンメシ、ダイズメシ、カンネが主食となった。仁田坂に帰ってもお金があっても食べものがないという深刻な食糧不足の状態は変わらず、皆同じ環境の中で飢餓に苦しんでいた。その頃の村落の目的はどのように食べて生き延びるかという事であった。

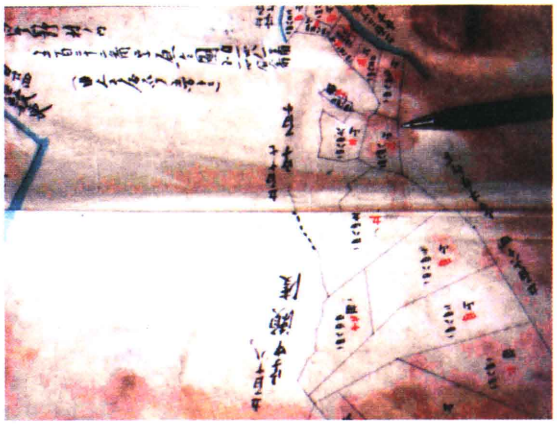
その為には、イヌ、ネコ、タヌキ、キツネ、ヘビ等々、あらゆるものが機会があれば食料になった。ネコ、タヌキの肉は臭いがして、とても美味しいという代物ではなかったが、食料として用いざるを得なかった。

―タヌキはくさか、猫もくさか、狐は身が赤い。農学校で豚を殺して病気で入院中の先生の奥さんにもっていった。食料がなかったけん。馬いけ場も自分たちで解体した。食べ物がないと浅ましい。集団生活してみるとわかる。

―この頃米泥棒のニュースがありますね。

むかしもあったですよ。からうす泥棒、水車ですよ、そこで米を盗られたこと、何回でもある。

しかし、そのような中でも家族同然の牛馬を食料として用いる家はまず無かった。



仁田坂：明治地籍図では山林だが、今は水田化されている。ボールペンの先

③ 恋愛

大正時代以前の電気がない時代は、若者衆による夜這いが盛んに行われていた。

じょうもん、ってむかし使った。器量よかったらじょうもんさん。結婚したらあんまりい

わん。

若い娘のいた家では、母親が娘の寝る間の前に寝て、若者の侵入に備えたので、夜這いが成功する事はなかった。しかし、追い返すだけで誰が来たのかは他言しなかった。

夜這いはだまっていく。戸は水を流して油流してぎしぎしいわんようにする。娘はふつう、側たに寝てる。ふっとみたら、ばあさんだった。逃げる。成功する例はない。追い返すだけ。

きょうだい、女ばっか。一ヶ月にいっぺん、何かあるときに集まる。むかしは酒飲みによう来おった。女子のおるところによってくる。酒もあるし、わたし目当てにはこん。

農作業の合間に行う「茶摘み歌」や、「ハンヤマイ」も恋愛の要素が多分に含まれていた。他地域から星野村へ茶栽培の出稼ぎにやってきた若い娘と星野村の男が結婚する事がしばしばあったが、この「茶摘み歌」がきっかけとなった事があったようである。

若い子を雇う。いつしか恋が芽生えて、認められなきゃ、駆け落ち、悲恋になる。みな親のいうとおり労働者として結婚した。奴隷と同じ。わたしの姉も妹もじょうもんさん。先生もすいちょる子には甲をつける。全甲。わたしは丙ばっか。姉たちは恋愛で結婚した。

（神主、茶工場の工場主など有力なものは）妾を持つ事があったが、二番目の妾を手がけ、三番目の妾を足がけといった。

ふつうはできん。金と体力がいる。女も惚れちゃこん。

④ おとずれる人

屋内では荒神さんであるかまどの神を祀っていて、どこから来たのかは定かではないがそれを祀る為に定期的に家に巡る人がいた。その人は、大黒様のような帽子を被り、長四角の祝詞を入れるものを持ち歩いていた。琵琶は持ってはいなかった。

一木の札のごと、神主さんももっとりますもんね。長四角で、神主が読む文句がはいっとる。石垣は崩れたところは補修するが、半永久的に持つ。接続点が六点。六点ついとかんと、前さ出てくる。野面やけん、なかなかむずかしいですよ。

（岩成俊策）

4.3.21　藤　山（2002年8月）

山本淳（すなお、昭和七年生）さん、幸子さん（夫人）、同行者：佐々木四十臣氏（広川に関する発言は佐々木氏）

聞取者：服部英雄　硴崎薫

地名：イボイワ、岩に疣イボがある。

ソネダ：田一枚、ソネにある。乾く。平成５年の旱魃はまたたく間に、水がなくなった。今頃（８月後半）から旱魃だった。

ホリタ：ホッタ、むかしは麦も作った。とれんとです。畝を作って麦を蒔く。

ヤマイヌノス：しこ名、柿原のうえ、イリモンワキ　白岩

バンゴヤ：番小屋、草切りの見張りだろうと思う。ごしゅ塚からあがったら、なんとか岩。あんまり用事のねぇけん忘れた。

天水田はとしによって、まちまち。谷の水がない。植えてしまうと一安心。あとはチビチビ。中干しがされん。いっぺん干上がった。しろかきがいっぺんにできん。水が不足、植うるときがむつかしい。おばーちゃん、田主丸から来ておどろいた。平坦部ではあらしろは一回。ここではいっぺん鋤いて水、ためて、すぐ中鋤。もう一回。あらしろの水持ちが悪い。水がまわらん。

今年（平成１３年）６月始め、飲み水のなかごと、水のなかった。鯉はわかみず、落としてやらんと、酸素が足らん。アップアップ。日がずーっと続くと、錦鯉もいつか死んでしもうた。８年前は池の山で、村の役員が雨乞

い祈願。旱魃でも植えられなかったことはない。(平野部の)広川あたりは植えるのが遅れるし、植えられないことがある。ポンプであぐる。

玉露する。手詰み。茶が終わって６月始め。それから田植えする。綱張って頭数そろえて、一日一反か二反。半日は苗取り。実際は（植えるのは）半日。田植え綱、四本ずつ、おや綱両方。おや綱を張らずにする人もある。むかしは（下手に植えると）ガンヅメが入らない。横しゅ、いかれん。尻の振りようで、雇ったとしよったですよ。近所の人、向こうから加勢にこらした。手間がえとは別にもしとる。

井手は古塚の方。谷水の方があった（暖）かい。湧き水は清水、えらい冷たかった。

白岩は、いまは、田はない。藤山の二，三軒で作った。谷の水で湿田。
イリモンワキもある。鹿里の旧道は赤松ゾネ。

石垣は大昔からある。わたしもつくですよ。崩（く）えとを、直し。災害（復旧事業）でしてもらうより、いい。一割でも二割でも負担金がある。三十万（円）はする。自分で、天然の石で、やったほうがいい。

田は三十二枚、町直しはしていない。崩(く)えたとを、修理はする。新たに（水田を）増やしたことはない。荒れ田、入れれば四十何枚。裏のにいさんの分も引き受けた。１町にはなる。水田だけなら星野で五本の指に入る。田植えも４日ぐらいかかった。でもそのころは弟、バーちゃん、家族が多かった。

むかし６俵ぐらい、計ってあるから１反は１反。石は図面に書いてある。かかり石っていう。ヨケはヨケとして実面積より引いてある。涅槃石って引いてある（詳細不明、冷や水ヨケは水田面積には加算されなかった。石垣分の面積も除外の意味か)。

ハレイ焼き、杉を切ったあと、だいぶ、したですよ。あずき、芋、ソバ、野稲。いまはハレェ焼きはできんですよ。いのししのえさになるだけ。自分の山で焼く。炭も焼いた、あとに杉を植えて、むかしは生計が立てられた。竹は全然だめ、杉は足場代。８００円、１０００円。むかし、引っ張ってつるつる降りてくる。

古塚は牛だけど、藤山は馬を飼ってた。材木出し、牛では出せない。肉牛も飼ったけど、役場が勧めるものはみなダメ。材木はスピードが出る。材木に、はねられることがある。牛は、前さ、いかん。とまれ、はやくいけ、言葉もわかるような馬が必要。「対州馬」、聞いたこと、なかですね。食が細かった。草切山はうちの横にあった。大草（おくさん）平、椋谷のそこらへんずーっと、合瀬、鹿里に入り会いがあった。茅場、屋根の葺き替え、地のよかとこ。麦屋根は三年しかもたん。ソソクリ（修理）がたいへん。茅は何倍でも保つ。十年で総替え、きれいかですもんね。職人が二，三人、加勢人がいても、労力にしかならん。茅は茶の肥やしにいい。茅の切り出しは、もやい（催合）でしとるはず。杉皮は長く保つ。

唐臼（からうす）は集落に一台、共同で使いよった。水のなかけん、唐臼の動かん。上にあったのをだんだん下におろした。いま唐臼米として売っている。

山に自然にはえているサンキラの葉っぱでヨド饅頭。(佐々木)「広川ではイゲノハ饅頭という。サンキラの根を煎じると梅毒の薬。」

星野のかけ干し米は高い。値段を見直してくれ。品質保証がほしい。

寺は（一部が）上陽の西光寺、三坂正念寺。ほかは田主丸の寺。遠かった。耳納山越えて、歩いて三時間半ぐらい。妹川（いもがわ）までは遊びに行った。星野村の寺子屋は浮羽郡にあった。寄宿して。青年会館は公民館。せんべいぶとんがあったけど、寝泊まりはあんまりせんかった。

警察は上陽の管轄。派出所はミカワ、学校は上陽町、むこうから人数が足りないのできてくれといわれた。星野はそのころ五クラス

あった。

瓦講、ふとん講、自動車講、目的ごとの講がある。月に一回ためる。

（服部英雄）

4.3.22　古　塚（2002年）

（その１）宮原秀雄さん　同行者：佐々木四十臣氏

聞取者：服部英雄　硴崎薫

地名

マルブチ：ちょっと深い、深か渕があった。

イデン谷　ゴウド：出水、全体的に少しずつ湧く。田のアラシロができん場合がある。

ネゴレ：いまは田はない。ずーっと上に出水がある。ちょっとした２枚か３枚のための個人池があって、上陽のひとが作る。今は茶畑。田があったのは私たちも知らん頃、ずーっと前。石垣ついたところはなかろう。

昭和３０年に竹屋根を開墾、補助はなかった。石垣はずーっと前、聞いてないぐらい昔。お墓の石に天保十三年ってある。山林を昭和二十年代に茶畑にした。水田は昔から水田。小さか時、１軒、蚕ばこうてあった。１軒か２軒。

向（むかえ）山、山林ばっか。個人山が多か。村有林も前からある。昭和２５年、山火事。

ハレー焼きってのは杉のあと、半年、枯れ木よせて焼き、地こしらえ。ソバなんか蒔いたことあるですよ。四〇年か前。２軒か３軒ほどでやる。ホト明け、防火線を開ける。上から火を付ける。１０人、２０人、人がいる。杉の枝の生もんちょっと入ってきたら、叩いて。小鍬で打つ。焼畑で開いた。畑にして使いよる。真っ先はソバ、燻（すぼ）れるうちに蒔く。ほかに小豆、一〇俵ぐらい取る。里芋。一回焼けば三年ぐらい。最後は野稲を植える。はろうて焼くまで、前は一五年か二〇年。前までは人口が多かった。

小豆坂から鷹取道。腰にかろう。炭でも竹でも。（道）今もあるけど、上の方には行かれん。田主丸まで下りで三時間。わっかとき、三夜さん、お祭り。帰ってくるとき、耳納山、うーんと高い。むこうは牛鳴き（泣き）峠、勾配がきつか。牛でも泣く。西からいくときはカンカケ（弦掛）峠、むこうの馬頭観音はよか水のでる。久留米の人、水汲みにくる。

納又（のーまた、カンカケ峠の下）の西光寺。歩いて一時間。石眼橋の上から道。つつみ、さろうじ（田代）、だいぶ近い。

草切り場はない。鷹取道路あたり、杉の小さか時、草切りに持ってた。やまじゃれき（山車力）、木ん馬のレールを滑らせてくる。そのそりが山しゃれき。盆には何日か分、八把・十把。山車力でおろして、人間もかついでおろす。ふつうは一日二把、腰、背中、肩で担ったり、オウコ、尖らせて刺す。二把で３０キロあります。一か（荷）か、２かで、４把。両掛けで１５～２０キロ。馬屋（まや）小屋に入れて、堆肥ができる。竹山、松山、少しずつはあった。いまはみな杉山。杉がよかったから。昭和３５年、杉の枝のいっぱい下ろして、寄せて、まるかして。一日十把、十五把も。割木は冬場の支度、こんば（こしば？）、ちょっと取りに行く。子供も仕事、スゴテもどってくる（背中にしょってくる？）。「スモドリ（素戻り、スデボリ？）すんな」とか。手ぶらで帰ると怒られる。豆ガラやソバを取ってくる。いまは子供も居らん。学校も廃校になりました。

藤山は馬ばっかり。古塚は牛が多かった。山出しの牛、木ん馬がある。ゆっくりゆっくり。馬の方が早いことは早いけど。馬いけ場はないですね。終戦後、むかしのじいちゃん、骨折した馬を山の中で殺した。ヤミで食べた。かならず調べにくる。たばこが二、三本、植えてある。どぶろくも見つかる。

せまちだおしはチョコチョコあっとですね。個人個人。井手はのびらきだけ。もうそう竹、

割って節をとってから水を入れる。古塚の田は七丁、広かとで八畝、狭いのは三畝。平均八枚で三反。地力差はあんまりない。柿はら、よしわら、のびらき、その一部は高級田地、一等田で土の深い。一等田地を花木にしたとこもある。シカワラ谷はイデノ谷より冷たい。水がかけられない。

水漏れは粘土でふさぐ。今でもほったらかしてくと漏る。畦、モグラ。ケラも掘る。光が嫌い。ジュース、ペットボトル、きらきらして効く。猪は電柵、一番効果。むかしは出よらんかった。二〇年くらい前から。猪は竹んこ、こんにゃくいもを食べる。芋やらかけぼしした米、みかんも登って食べる。

シイ、カシはレクレーション。トリモン、子供のおやつのかわり。シイは小さい。生でん食べられる。カシはあく抜き。クヌギは栗虫をとる。栗虫は「しも」に入って木を枯らす。魚釣りのえさ。

さくらんぼ、酸いやつ、桑ン実、やまもも、むく、やまいちじく、おにぐるみ。よか栗は所有者があります。ささぐりは雑木山、だれがとってもよい。わさびも所有者があります。（佐々木）クリ、コンニャク、ワラビ、タケノコは山運上がありますよ。

中道の下にモンノクチってある。昔の人が作った大きな石。壊れない。

（服部英雄）

（その２）宮原政徳（まさのり）さん（ゴウドの田の中にて）

ゴウドの流れは五本。一本は、道路ができる前は池で使った。いまでも梅雨時分は溜まる。自分は昭和一〇年生まれ。自分の三代前の人が、あの角のところを積んだ。そこの二枚ほどを親父なんかはシンビラキといった。もとは原野だったと思う。そこの石垣、西の隅。親父の時から三回は崩（く）えた。いま少し後ろに下げて積み直し。だから二重になっている。

（服部英雄）

4.3.23　三　坂（2003年）

井上醍吉

聞取者：服部英雄

蛇淵：深い岩場、狭くて深い、泳がれん。いまは木材搬出、通行のため埋めた。

三人淵　ウリダ（売田）谷：ウリダは３人くらいで作った。何反か石垣がついてある。山出し道があった。牛も馬も通る。キャンプ場の水はここからとる。小さいメダカがシボリ（くぼみ）にいる。干あがったら、終い。アブラメ、ハヤはおらん。エノハもおらん。

タイラノ（平野）　フキハラ　アマツボ：むかし茶わらもあったし、田んぼもあった。田→茶畑→杉山。田は１反半ぐらい、石垣はない。土坡。茅原の石川さん、それ以前に開いた。隠し田ではなかろう。山口：山口というところがあって、滝が見える。そこと高度が変わらんから山口という。シロマン：田はない。イワヤ：田がある。石垣がついてある。４、５枚。イデグチ、三坂地区の水アビバ。堰堤があって、下がほげて深い。

お寺の向こう、田があった。石垣が何段かある。

金山、鉱石は向かいのやま。縦坑、横坑。かろうてきて。小さい頃ニッセイ金山があった。金スリ石。精錬所は滝の脇、百貫、えらい金がとれた。むかしは金山に入るとき、灯明石。皿ではない。うちの近くにそれが落ちていた。女性も坑道に入りよって、鉱石を箱で出す。かごからって、山から下りた。谷に唐臼、唐臼は木でバッタンバッタン。うえでは牛で臼を引き回す。石臼で粉にする。ユリバチ、水銀使って、大きな鉢、ゆすって金をよせてとる。水銀に金がつく。金と砂を分ける。そのとき、焼く。千々屋に三、四か所。ドベ。鉱石を擂ってとった滓のこと。青酸カリを使う。ドベを流すと魚が死ぬ。それを拾って食べた。濁って上陽辺まで魚が死んだ。（そ

れで）本流沿いは米があんまりできなんだ。

うちの親父も金山にしばらく行きよりましたよ。鑿岩機のノミ、ノミの運搬。泊まる時、徹夜。弁当を持って行きよりました。農閑期だったんでしょう。

星野の人、硅肺は鑿岩機を使う最近のこと。真っ白になって出てくる。マスクをはめんかった人、早く死んだ。

むかし落盤事故があって、黄金山正念寺ができた。真宗お東。金山師は鹿児島から。芝居床という地名がある。上福島町、下福島町。芸者屋、遊郭があった。タタラという、うちの近く。江戸時代までの話、女郎屋町という地名は芝居どこの近く。

うちは兼業農家。金山、木材搬出で生活。馬は二年ぐらい引いた。伐採、搬出。山の木はたいてい知っている。去年木材業をやめた。杉と檜、松はあまりない。雑木、シイ、栗は少ない、カシは多い。山ぐりはすくなか。クヌギは植えてある。炭は出したことはない。下の牛原さんは炭を焼く。杉の炭はすぐに火がつく。一番はカシ、ツバキ、クヌギ、堅い木。シイはだめ。ほとんど自営（焼き子はいない）。持ち山や、山を買ったり。国有林で、倒してからマイトで発破。百年、二百年の木もあった。管理人が広島さんの頃。終戦直後、木炭自動車の頃、炭がえらく高かった。炭焼きさんも多かった。

杉は電柱材の頃が最盛期。自動車がぶつかると、コンクリ柱は折れる。木材は粘り。コン柱の方が、被害が出る。木の方が、弾性がある。下が腐れるまで、２５年。防腐剤注入して３０年。雑木は枕木にした。

林業が一番危険。４４年のうち一人死亡事故。山出しの索道ワイヤー。夕方終わり頃、突っ張りの木を直そうとして、もうそれで帰ろう。少しやったところで、新しいワイヤーで滑った。

ずーっとむかし、トビではねてシュラ、４メーター材、短材、そんなころは何人も亡くなっている。昭和２５年からシュラ出しをした。長材は８～１０メートル。それもやった。４メートルをつないでいく。カーブでもできる。雨降りなんかに落とす。トビうちを持ってやっていた。山で４メーターの短材に切ってしまって、積んでおく。しま剥きして枯れたとき、谷間に崩し落とす。ドバ。林道終点まで出す。川流しはしなかった。日田は大川まで流すけど。日田は、電柱材は取れない。役場の下、コウモリ岩、そこは流したかもしれないなぁ。

シュラから、木ン馬道、馬で引き出す（＊シュラは木を溝状または枕木状に並べて搬出用の道としたもの、木馬は搬出具で、木馬道は枕木状に並べる。木馬道の方が整備されていたものか）。

価格がいいとき、１０センチ丸太が一日の日当で出る。足場材、電柱材。木一本が日当（何本も出せば、何日分も稼げたの意味か）。

山に入っては行けない日、山の神という祭。１０月１６日、正月９、１０日。安全を祈願。女が入ってはいかんとは聞かん。ケガすると笑われる。平成３年台風。切ってずった。はねられた。労災も高い。山ン神祭、人が山には入らない。土用、土を扱うとが、いかんとですよ。時間まで書いちゃる。石ころでも蹴っちゃいかん。神宮暦に書いちゃる。迷信とかいうけん、信仰しやる人が土用の日だけは土を扱ってはいかん、て。ワイヤーを向かいから張っていた。穴を掘って木材を土のなかに埋めて支柱。ワイヤーの取り付け。ボッキ、試運転してひっくり返った。今考えてみると、ちょうど土用の日だった。話だけじゃなかばいなぁ。暦に書いてある。夏（の土用）だけじゃない。晩は仕事せんけんえぇけど。一時何十分とか。寿命が短かなるまでいわっしゃるですよ。左官（しゃかん）、知ってる人は（土用は）休む。

節分、家建てでも結婚でも、なんでも節分がいい。

台風で揺れた木は横に傷。根から倒れたのはいい。途中で折れたのは弱くなっている。パルプ材にした。端は山で、ずーっと寄せ焼き。

毎年下払い、草払う。７～８年目、成木になって枝打ち、１１年目、すてぎ（除伐）、百本あるなら十本間伐。１割ぐらい。森林組合から補助が出る。枝打ち、除伐がセット。ぬくい時は皮がむける。寒いときにする。

木材業は商売、取引、材木を買って搬出が仕事。林業家は木を育てる。生産が仕事。

（服部英雄）

4.3.24　平　山

豊福常喜さん(昭和三一年生)と母(照美さん)
同行者：石井里津子ほか
聞取者：服部英雄

ひいじいちゃん、久留米で百姓をしていた。いまもお寺は久留米。朝鮮さ、いこか、思案した。息子が四人、外国に移民に行くよか、良かろう。山をこうちゃろ。その頃補助金が出た。平山は三尺道しかない。じいちゃんが、人がこんと思って入った。人を雇うて、肩上（かたうえ、人力）で。二丁ばかり開いて、昔の銭で八〇〇円くらい、補助金が出た。じいちゃんの喜びよらした。その前は原野。山林、藪山だった。葭があった。大正から開いて昭和にかけて。七丁開いた。山の向こうまで。ひいじいちゃんも久留米から呼んで、いっしょになった。昭和七年、弟さんが分家して開墾はそこでやめた。父は大正一二年生まれ。浮羽の新川（にかわ）小学校を卒業した。じぶんは戦後３７，８年頃、毎日（十籠の）小学校に通うてきた。通学の雪の降る場合、やおなかった。あんまり苦労するから、十籠下りてきた。

父の従兄、豊福三井さん（本家）と二家族が、一つの家にいた。電気はない。水車で自家発電した。ため池は田のあとでできたけど、そんなに（水の）心配はない。ずーっと井手がある。今はコンクリー。まぁいっちょう上に土で作った井手。反当は、いまは八俵、まえは五俵、久留米の半分。できた米は十籠から青年団、からいにきよった。供出の時。牛やら馬で乗せて、星野の方に出した。浮羽の人が作る場合は浮羽に出した。滝の脇へんの人、米を買いに来て、赤ちゃんを米の上に乗せていった人がいた。女の人でも２斗ぐらいからっていく。３０キロ。滝の脇、田もあるけど、金山のあったけん、人も多かったし、鉱石、からいつけるけん、強かったげな。女の人でも一俵やるなら、(途中)おろさんで持ってくげな。

平山は坂本ゆきちゃんと、川島さん、葛籠からきた人、川向こうの上を作る。その下に野上さんが居った。いまは広島県。もともと棚田だった。今小屋があるところが坂本さん。七丁あって、いまは六丁が杉山。小作は葛籠が多かった。終戦後農地解放になったところは、みな早く杉山になった。今作っている面積は１丁ぐらい。

田の名前は一反畝町とか家の北が北田とか。谷の向こうに一丁ばかり田があったけど、杉やらクヌギやら。平成になってから田をやめた。低い杉苗が植えてあるところ、本家が去年放棄したところ。イノシシが荒らす。ことし平山も田を放棄した。あとはここの畑だけ。

茅原も補助金が出た。尾払の狭い田んなか、仁田忠太さん、じいちゃん一緒に補助金もらいに行った。

牛の草はどこでんとれた。むかしのことはあまりしらん。四人兄弟、力あわせて石垣ついて、七丁も開墾。小作にもたくさん出したら農地解放。最後は兄弟バラバラ。田も全部なくなった。

（服部英雄）